



Title	3-4歳齡児におけるいざこざ後の仲直り行動に影響を与える要因
Author(s)	大西, 賢治
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2021, 47, p. 95-112
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79071
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

3-4 歳齡兒におけるいざこざ後の仲直り行動に影響を与える要因

大 西 賢 治

目 次

1. はじめに
2. 方法
3. 結果
4. 考察

3-4 歳齡児におけるいざこざ後の仲直り行動に影響を与える要因

大 西 賢 治

1. はじめに

幼児は、仲間との遊びやいざこざ、仲直りなど、日常生活の中で社会的能力を発揮し、仲間との関係を調節している。幼児が集団生活を行う中で、他児との葛藤に直面する場面は頻繁にみられ、そのような葛藤が敵対的な交渉を伴ういざこざに発展することも少なくない。いざこざによって関係が損なわれた後に関係を修復する仲直り行動は、集団生活において他者との円滑な関係を築くために欠かせないものである。

幼児期における仲間とのいざこざでは、同年齡の仲間と葛藤状態の中で様々な交渉が行われる。そのため、いざこざは、自己主張や自己抑制といった能力が発揮され育つ場面である一方で、その後の仲間との社会的な関係に深刻な問題を引き起こす恐れのある状況でもあるという二側面をもっている（安田・日野林, 2009）。いざこざは大人との関係では得られず、発達段階が似通った仲間との間でのみ経験される交渉である。斉藤 (1986) は、いざこざを観察することで、子ども同士の相互交渉が子どもの社会的能力の発達においてどのような役割を果たすのか考察できることを指摘し、いざこざは貴重なエピソードであることを強調した。

いざこざそのものに関する研究だけでなく、いざこざ後の仲直りがどのように成立するのかについても研究が進んでいる。Fujisawa, Kutsukake, & Hasegawa (2005) は、PC-MC 法を用いていざこざ後場面と通常の場面を比較し、謝罪、物の提供、物以外の提供（例：相手に順番を回す）、和解、遊びに誘う行動がいざこざ後場面において増加することを示した。つまり、幼児はこれらの親和行動を用いて仲直りを試みようとしていた。いざこざ後に仲直りの試みが相手に受け入れられ、仲直りが成立するとその後は当事者間で攻撃行動が起きる頻度が低くなるが (Ljungberg, Westlund, & Lindqvist, 1999)、仲直りを試みたが相手に受け入れられなかった場合には、攻撃行動が頻繁に起きることが明らかになっている (Fujisawa et al., 2005)。つまり、仲直りには再び攻撃されるリスクやいざこざのストレスを減らす働きがある (Fujisawa et al., 2005; Ljungberg et al., 1999)。

「Fujisawa et al. (2005) は、幼児期の仲直りにどのような要因が影響するのかについても研究を行っている。いざこざの相手がより親密な友達であるときや同性である場合、他児の介入がある場合や保育士の介入がない場合に仲直りの試みがより頻繁に起き、そ

のうちいざこざの相手がより親密な友達であるときや他児の介入がある場合に、仲直りが成立しやすいことが明らかになった。また、いざこざを起こした児の性別の組み合わせが仲直り行動に影響があるとする研究もある。3歳齢では男児同士のいざこざは女児同士のいざこざよりも仲直りをしにくい (Westlund, Horowitz, Ljungberg, & Jansson, 2008)、年齢が上がるにつれて性別の組み合わせの影響はみられなくなる (Butovskaya & Kozintsev, 1999; Westlund et al., 2008) という報告がある。Fujisawa, Kutsukake, & Hasegawa (2006) は、いざこざ後の行動を分析した。彼らは、4歳齢から5歳齢の間に仲直りや他児によるいざこざの受け手への親和行動（慰め行動）が急激に増加することを明らかにし、この変化は社会的能力の発達に関連があると指摘した。このように、仲直りに幼児の社会的能力が重要である可能性は以前から指摘されているが、これまでの仲直り研究において検討されてきた要因は、いざこざの当事者の社会関係や性別、年齢、他者の介入などが多く、仲直りに児の社会的能力がどのように影響するかについての研究はほとんど存在しない。

言語は、情報伝達的手段であるとともに、思考の手段であることが知られている。言語能力は他者とのコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしている。子どもは1歳齢前後で初語を発し、言語伝達が始まる（大久保, 1991）。しかし、2、3歳齢頃までは語彙や言語表現が乏しいため、伝達場面の状況、身ぶり、表情などの非言語的要素に強く依存している。3、4歳齢になると語いや表現が以前より豊かになり、幼児間の対話が活発になる。思考や伝達的手段となる言語の発達には他者との相互交渉に強く影響を与えている。例えば、言語能力の高い児はふり遊びを行うことが多い (Dunn & Cutting, 1999)。また、言語能力は遊びだけでなく、いざこざに対しても影響を及ぼすことがわかっている。Dunn & Cutting (1999) は言語能力が高いといざこざを起こす頻度が低くなることを示した。このように言語能力の発達は他者との関わりの中で促され、また、社会行動にも影響を与えている。

心の理論も他者の相互交渉に重要な能力である。心の理論は Premack & Wooclyff (1978) によって初めて提案され、広義では意図や欲求、目的、信念などといった“心的状態”を自分自身や他者に帰属することと定義されている。発達心理学においては、「自分の考えとは異なる他者の誤った考え（誤信念）や行動を推測する能力のこと」（小川・子安, 2008）とされている。幼児が心の理論の能力を獲得しているかどうかは、他者の心の状態を質問する誤信念課題 (Wimmer & Perner, 1983) を用いて検討される。Happé (1995) の研究では、幼児の誤信念課題の正答率は3歳齢から4歳齢にかけて急激に上昇し、言語精神年齢が4歳齢のときに課題の正答率が50%に達する。誤信念課題に通過する児は他者への反応がよく、ふり遊びをする頻度も増えるなど、コミュニケーションをより円滑に行うことができる傾向にある (Dunn & Cutting, 1999)。さらに Dunn & Cutting (1999) の研究では、3歳齢から4歳齢の子どもにおいて誤信念課題の成績がよければいざこざを起こす頻度が低くなる傾向があった。

他者の情動を理解する能力もコミュニケーションにおいて重要になる。他者情動理解の能力は、共感性と関連が深いことが知られている。共感には様々な定義が存在するが、一般的には、他者の情動表出を見たときに自分自身にも同様の情動が生じる反応と理解されている（大西，2018）。他者情動理解の能力やそれと関連が深い共感性がいざこざや仲直りに与える影響について、いくつか報告がある。De Wied, Branje, & Meeus (2007)の研究では、青年期の男女では共感性が高いといざこざを悪化させず、積極的に問題解決を行う傾向があった。幼児期においても、共感性の高さはいざこざの頻度の低さと関連があった (Dunn & Cutting, 1999)。

本研究では、幼児期の仲直り行動がどのような過程を経て行われ、どのような要因の影響を受けているのかを明らかにするために、いざこざ後場面を観察した。本研究では、仲直りに影響を与える要因として、幼児の社会的能力（言語能力（語彙力）、心の理論、他者情動理解の能力（共感性と関連））に注目した。研究の対象としたのは、これらの社会的能力の発達途上である (Happé, 1995)、3-4 歳齡児であった。また、幼児それぞれの社会的能力の影響を検討するために、いざこざ場面において先に敵対的交渉を行った児を「開始児」、最初に敵対的交渉を受けた児を「受け手」として区別し、その後の仲直りの試みがどちらの児から行われたものであるかを区別した分析を行った。さらに、本研究では、いざこざが生起してから仲直りが成立、または不成立に至る過程を、仲直りの試み、仲直りの成立/不成立、仲直りが不成立だった後の行動に分けて分析を行った。また、先行研究では、仲直り行動に影響を与える要因として、児同士の親密度、他児の介入、保育士の介入や性別の組み合わせなどが報告されている (Fujisawa et al., 2005)。そこで、本研究では、幼児の社会関係として、従来から注目されている二者間の親密度、そして、クラスの近接、遊びのネットワークにおける児の中心性（そのネットワークの維持にどの程度中心的な役割を示しているのかを表す指標）を算出した。中心性は、児の友達の多さや人気と関連する指標である。さらに、仲直り行動には他者の介入が影響を与えるとわかっているため、いざこざの当事者の性別、他児の介入、保育士の介入の影響についても検討した。

2. 方法

2-1. 研究実施施設、研究期間

本研究は、大阪市内の M 児童センター（以下、保育園とする）において実施した。行動観察及び検査は 2012 年 9 月 19 日から 12 月 3 日までの期間に行われた。期間中の総観察日数は 30 日間であった。

2-2. 研究協力児、研究倫理

本研究は、保育園に 3 つある 3・4 歳齡児クラスのうち、1 クラスを対象として行われ

た。このクラスに所属する児は25名（男児11名、女児14名）、担当保育士は2名（どちらも女性）であった。全ての児の保護者に対して文書を配布し、研究の実施に対して同意を得ることのできた児24名（男児10名、女児14名）を本研究の研究協力児とした。協力児の観察開始時点での平均月齢±SDは45.42 ± 2.60 ヲ月（範囲：41—51 ヲ月）であった。本研究は大阪大学人間科学部行動学系の倫理委員会の承認を得た上で実施した。

2-3. 行動観察の手続き

本研究の観察は教室内及び園庭での自由遊び時間において行われた。行動観察法を用いて児の仲直り行動、クラス内の社会ネットワークのデータを収集した。観察者は研究協力児の過半数が遊んでいる状況で、教室や園庭が見渡せるよう教室や園庭の隅に立ち、以下の手続きに沿って観察を開始した。

観察者は、教室や園庭が見渡せる教室や園庭の隅からイベントサンプリング法 (Martin & Bateson, 2007) を用いてクラス全体を観察し、いざこごを記録した。安田・日野林 (2009) を参考に、「直前に自分に対して攻撃行動を示していない他児に対して、身体攻撃、言語攻撃、威嚇、物や場所の占有、遊びの邪魔のいずれかが観察され、それに対し1名以上の幼児が泣く、もしくは抵抗の動作や表情を示した場合」にいざこごの生起とした。いざこごを発見次第、いざこごを起こした児の声を聞きとることができる距離まで近づき、最初に攻撃行動を行った児と攻撃行動を受けた児が映るよう撮影を行った。本研究では最初に攻撃行動を行った児を「開始児」、攻撃行動を受けた児を「受け手」とする。開始児と受け手の名前、性別を記録した。いざこご後の観察は10分間行い、開始児と受け手が離れどちらも撮影できない場合は、受け手を追って撮影した。

いざこご後の観察において、仲直りの試みと仲直りの成立を記録した。「仲直りの試み」の定義は、Fujisawa et al. (2005) にならい、「謝罪、物の提供、物以外の提供（例：相手に順番を回す）、親しげな身体接触、親しげな話しかけ、遊びに誘う、相手の遊びに加わるといった行動が起こった場合」とした。そして、仲直りの試みを受けた相手が「うなずき、微笑み、肯定的な発言、一緒に遊ぶ」といった反応を示した場合、「仲直りが成立」とみなした。仲直りの試みが起こった場合、開始児と受け手のどちらから行ったか、仲直りが成立したかを記録した。仲直りの試みが複数回行われた場合にはその回数も集計した。また、いざこご後の観察において、他児の介入の有無、保育士の介入の有無を記録した。他児の介入の定義は、「他児（いざこごの開始児でも受け手でない児）がいざこごに関連して開始児や受け手、保育士に対して起こした行動」とした。他児の介入は、親和的な行動、攻撃的な行動、仲直りを促す提案や保育士への報告に分類された。

いざこごのサンプリングとは別に、1日に数回、クラスの全研究協力児の近接関係及び遊びの関係を走査サンプリング (Martin & Bateson, 2007) を用いて記録した。観察者は児が遊んでいる部屋もしくは園庭を決まったルートでまわり、1m以内に近接している児、一緒に遊んでいる児を全て記録した。走査サンプリングのデータは、いざこごに参

加した協力児の社会ネットワークにおける中心性（そのネットワークの維持において重要な役割を果たしているほど高くなる値）、開始児と受け手のペア間の親密度を算出するために用いた。走査サンプリング中に近接関係と遊びの関係を記録したため、中心性と親密度の指標も近接と遊びの 2 通りのデータからそれぞれ計算した。

近接関係と遊び関係のネットワークにおける中心性として、ネットワークにおける辺の有無のデータから以下の数式を用いて各児の固有ベクトル中心性を算出して用いた。近接関係、もしくは遊びの関係の無向グラフにおける頂点 i （各幼児）の固有ベクトル中心性 $C_{ev}(i)$ は次のように定式化された。

$$C_{ev}(i) = \frac{1}{\lambda} \sum_{j=1}^n a_{ij} C_{ev}(j)$$

a_{ij} は無向グラフの隣接行列 A の成分であり、 λ は A の最大固有値を表す。中心性の分析には計算ソフトウェアの R2.14.0 の `sna` パッケージを用いた。さらに、全研究協力児ペア間の親密度を算出した。算出には以下の式を用いた。

近接（または遊び）を用いた親密度
 = 各ペアにおいて近接（または遊び）が観察されたスキンの回数
 ÷ ペアの両方の児が観察されたスキンの回数

2-4. 検査の手続

言語能力、誤信念課題、他者情動理解の検査は、以下の手続きに従い、自由遊び時間に 1 人ずつ別室に来てもらって行った。言語能力の測定は、絵画語い発達検査（上野・名越・小貫, 2008）を用いて行った。この検査は、3 歳 0 か月～12 歳 3 か月の子どもを対象とし、基本的な語い理解力を測定するものであり、日本の研究者に広く用いられている。

協力児の心の理論について検討するため、Wimmer & Perner (1983) の誤信念課題を用いて心の理論を測定した。お話に登場するキャラクターは、幼児が身近に感じるウサギとネコに、隠すおもちゃはボールに変更した。それぞれの場面について紙芝居を作成し、誤信念課題のお話を児に読み聞かせた。その後、協力児に対して他者信念質問「ウサギちゃんはボールで遊ぼうと思っています。ウサギちゃんははじめにどこを探しますか。」、現実質問「ボールは今どこにありますか。」、記憶質問「ウサギちゃんは散歩に行くときどこにボールを入れましたか。」の 3 つの質問を行い、全ての質問に正答した場合のみ誤信念課題を通過したものとした。

協力児の他者情動理解の能力を測定するため、Feshbach & Roe (1968)、浅川・松岡 (1987)、渡辺・瀧口 (1986) を参考に、他者情動理解の測定課題を実施した。検査者は、協力児に喜びと悲しみ、恐れ の 3 つの情動場面についての短い物語を話し、その場면을印象付ける絵が描かれた 1 枚のカードを協力児に見せた。その後、検査者は、喜び、悲しみ、

恐れ、無表情の4つの表情をした顔が描かれている表情図を協力児に見せ、物語の主人公の感情に近いと思った表情図を児に選ばせた。検査者は、ここまでの流れを1試行とし、喜びと悲しみ、恐れについてそれぞれ2試行ずつ、計6試行の検査を各協力児に対して行った。情動場面の物語は喜び、悲しみ、恐れのそれぞれにおいて3話ずつ用意し、そのうちから各協力児にランダムに2話を選んで実施した。また、喜び、悲しみ、恐れの情動場面の順番もランダム化して実施した。Feshbach & Roe (1968)の研究では、物語の主人公の性別が実験参加者の性別と一致する場合に情動理解の成績が良かった。そのため、本研究では物語の主人公は実験参加者と同じ性別に設定した。つまり、研究協力児が男児の場合は主人公の名前をたろうくん、女児の場合ははなこちゃんとした。正しい感情を選択できた場合は1試行につき1点とし、得られる得点の範囲は0~6点であった。

2-5. 分析方法

本研究ではいざこざが生起してから仲直りの成立に至るまでの行動に、どのような要因が影響を与えているのかを分析した。具体的には、「仲直りの試みの生起」、「仲直りの成立」、試みが受け入れられなかった場合の「仲直りの試みの回数」を3つの応答変数とした。また、説明変数として「開始児と受け手の社会的能力（開始児と受け手の言語得点、誤信念課題の通過/不通過、他者情動理解得点）」、「開始児と受け手の社会関係（近接と遊びそれぞれのネットワークから算出した開始児と受け手の中心性、親密度）」、「協力児の性別（開始児 - 受け手: 男児 - 男児、女児 - 女児、男児 - 女児、女児 - 女児）」や「他者の介入（他児の介入、保育者の介入）」の影響を検討した。

本研究の分析には一般化線形混合モデル (GLMM) を用いた。いざこざに参加した児には偏りがあったため、「開始児の ID」、「開始児の年齢」、「受け手の ID」、「受け手の年齢」を変量効果として分析モデルに含めた。本研究で記録できたいざこざの事例数は、全ての変数を同時に固定効果として含めたモデルを分析するには十分でなかったため、説明変数をその特徴により3つに分類し、別々のモデルとして分析した。分類は、(1) 開始児と受け手の社会的能力、(2) 開始児と受け手の社会関係、(3) 協力児の性別、他者の介入とした。全てのモデルにおいて、各モデルのすべての要因を含めたモデルを最大モデルとし、赤池情報量規準 (AIC) を用いたステップワイズ法でモデル選択を行った。最大モデルから徐々に変数を減らし、AIC が最も低くなるモデルを選択した。「仲直りの試みの有無」もしくは「仲直りの成立の有無」を応答変数とするモデルでは、応答変数が有無の2値データであるため、応答変数は二項分布に従うと仮定し、リンク関数は logit リンクを使用した。「仲直りの試みの回数」を応答変数とするモデルでは、応答変数が回数データであるため、ポアソン分布に従うと仮定し、リンク関数は log 関数を用いた。

3. 結果

3-1. いざこざ事例の概要

本研究で観察されたいざこざは 60 事例であった。そのうち、仲直りの試みが起こったのは 37 事例、起こらなかったのは 23 事例であった。仲直りの試みが起こったいざこざ 37 事例内で、開始児からの仲直りの試みは 26 事例、受け手からの仲直りの試みは 20 事例生起した（いざこざ 9 事例において開始児と受け手の両方からの仲直りの試みが記録された）。

開始児から仲直りの試みが起きた 26 事例中で仲直りが成立したのは 14 事例、受け手からの仲直りの試み 20 事例中で仲直りが成立したのは 9 事例であった。いざこざ 60 事例でみると、仲直りが成立した事例は 23 事例であり、37 事例では仲直りが成立しなかった。

仲直りが成立しなかった 37 事例のうち、仲直りの試みが起こった 14 事例における試みの平均 $\pm$ SD は 1 事例あたり 2.36 ± 1.55 回、そのうち、開始児から受け手への試みの平均 $\pm$ SD は 1.50 ± 1.56 回、受け手から開始児へは 0.86 ± 0.77 回であった。いざこざを起こした児として観察された児は 22 名、受け手として観察された児は 22 名、47 ペアの間でいざこざが観察された。

観察された 60 事例のいざこざのうち、男児同士によるものが 25 事例、女児同士が 23 事例、男児から女児に対して起こったものが 7 事例、女児から男児に対して起こったものが 5 事例であった。他児の介入が見られたいざこざは 26 事例、保育士の介入のあったいざこざは 13 事例であった。他児の介入があった 26 事例のうち、いざこざに関連して開始児もしくは受け手への親和行動が見られたものは 24 事例、攻撃行動が見られたものは 19 事例、仲直りの提案や保育士への報告が見られたものは 3 事例であった。

3-2. 社会的能力の概要

言語得点の平均 $\pm$ SD は 8.21 ± 6.28 点（範囲：1 - 24 点）であった。誤信念課題は協力児 24 名中 4 名のみが通過した。他者情動理解得点の平均 $\pm$ SD は 2.79 ± 1.53 点（範囲：0 - 6 点）であった。

3-3. 「仲直りの試み」に影響を与える要因

仲直りの試みに影響を与える要因を検討した。まず、「開始児から受け手への仲直りの試みの有無」に影響を与える要因を分析した。開始児と受け手の社会的能力の影響を検討した結果、「開始児の誤信念課題」のみが開始児から受け手への仲直りの試みの有無に影響を与えており（不通過 vs. 通過, $\text{Coef} \pm \text{SE} = 2.17 \pm 0.92$, $t = 2.36$, $p < 0.05$ ）、開始児が誤信念課題に通過している場合は、開始児が仲直りの試みを起こす確率が高かった（図 1）。開始児と受け手の社会関係、協力児の性別や他者の介入は、開始児から受け手への仲直りの試みの有無に影響していなかった。

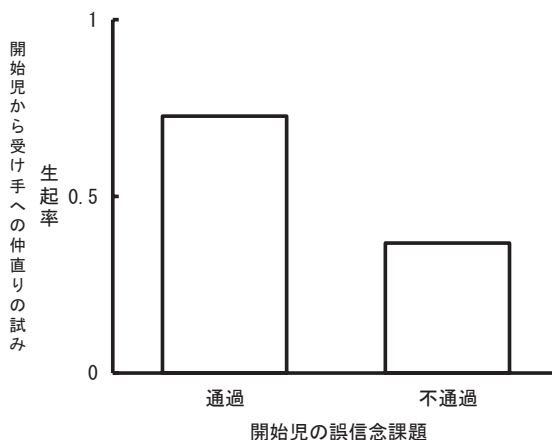


図1 開始児の誤信念課題の通過または不通過による開始児から受け手に対する仲直りの試みの生起率

次に「受け手から開始児への仲直りの試みの有無」に影響を与える要因を検討した。開始児と受け手の社会的能力の影響を分析した結果、言語得点、誤信念課題、他者情動理解得点は仲直りの試みに影響していなかった。次に、開始児と受け手の社会関係について検討した結果、「開始児と受け手の親密度」が「受け手から開始児への仲直りの試みの有無」に影響を与えており（近接による親密度, $\text{Coef} \pm \text{SE} = 7.46 \pm 3.67, t = 2.04, p < 0.05$; 遊びによる親密度, $\text{Coef} \pm \text{SE} = 8.64 \pm 3.43, t = 2.52, p < 0.05$ ）、親密度が高いペアほど仲直りの試みが生起しやすかった。さらに、協力児の性別や他者の介入の影響を分析した結果、開始児と受け手の「性別の組み合わせ」が「受け手から開始児への仲直りの試み」に影響を与えていた ($F(3, 54) = 2.94, p < 0.05$)。性別の組み合わせについて、逐次 Sidak 法を用いて多重比較を行った結果、男児同士の間、女児から男児へのいざこざの間、女児同士と男児から女児へのいざこざの間、男児から女児へのいざこざと女児から男児へのいざこざの間に有意な差がみられた（図2）。

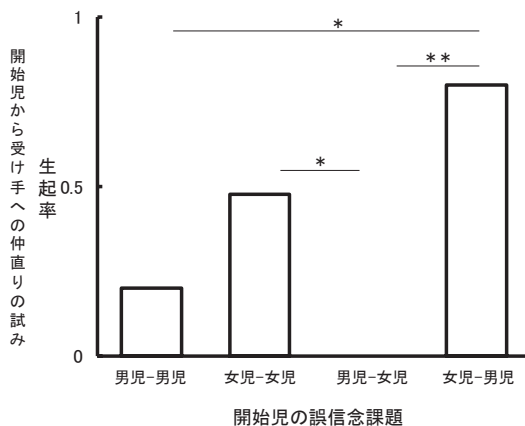


図2 開始児と受け手の性別の組み合わせによる受け手から開始児への仲直りの試みの生起率

図内の線と*は、逐次Sidak法を用いた多重比較の結果を表す。

***: $p < 0.01$, *: $p < 0.05$ 。

3-4. 「仲直りの成立」に影響を与える要因

仲直りの成立に影響を与える要因を検討した。まず、「開始児から受け手への試みによって成立した仲直りの有無」に影響を与える要因を分析した。開始児と受け手の社会的能力の影響を検討した結果、「開始児の言語得点」が影響を与えており (Coef $\pm$ SE = 0.24 ± 0.103 , $t = 2.30$, $p < 0.05$)、開始児の言語得点が高いほど、開始児から行った試みは受け入れられ、成立することが多かった (図 3)。開始児と受け手の社会関係、協力児の性別や他者の介入は、開始児から受け手への試みによって成立した仲直りの有無に影響していなかった。

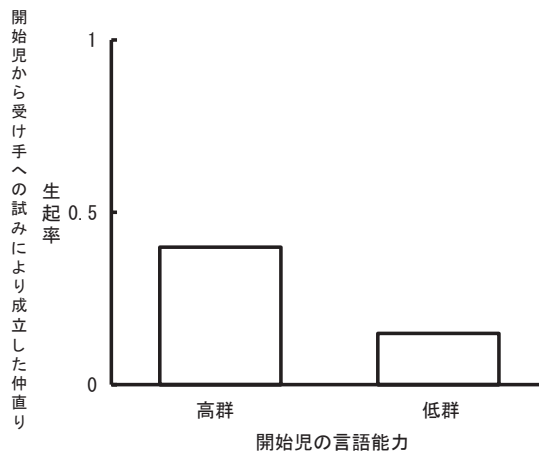


図3 開始児の言語能力による開始児から受け手への試みにより成立した仲直りの生起率
開始児の言語能力が全体の平均より高い場合に高群、低い場合に低群とした。

次に、「受け手から開始児への試みによって成立した仲直りの有無」に影響を与える要因を分析した。分析の結果、開始児と受け手の社会的能力、開始児と受け手の社会関係は影響していなかった。協力児の性別や他者の介入の影響を検討した結果、「他児の介入」の有無のみが「受け手から開始児への試みによって成立した仲直り」に影響を与えていた (介入なし vs. 介入あり, Coef $\pm$ SE = 2.35 ± 1.13 , $t = 2.09$, $p < 0.05$)。

3-5. 仲直りが成立しなかった際の「仲直りの試みの回数」に影響を与える要因

仲直りの試みの回数に影響を与える要因について検討した。まず、「開始児から受け手への仲直りの試みの回数」に影響を与える要因を分析した。開始児と受け手の社会的能力の影響を検討した結果、「受け手の言語得点」のみが影響を与えており (Coef $\pm$ SE = 0.12 ± 0.02 , $t = 6.21$, $p < 0.01$)、受け手の言語得点が高いほど開始児が行う仲直りの試みの回数が多くなっていた。開始児と受け手の社会関係、協力児の性別や他者の介入については、いずれの要因も影響していなかった。

次に、「受け手から開始児への仲直りの試みの回数」に影響を与える要因を分析した。その結果、開始児と受け手の社会的能力、開始児と受け手の社会関係、協力児の性別や

他者の介入について、いずれの要因も影響していなかった。

4. 考察

本研究では、いざこざの発生後、仲直りの試みが生起し、仲直りが成立するまでの過程において、どのような要因が影響しているのかを検討した。特に、幼児の社会的能力が仲直りの過程に与える影響を検討するため、いざこざの発生時に注目し、最初に敵対的交渉を行った児を「開始児」、最初に敵対的交渉を受けた児を「受け手」として分類した。その上で、仲直りの試みや仲直りの成立に影響を与える要因を「開始児」と「受け手」それぞれの社会的能力や両者の関係性、どちらから起こった行動かを考慮して分析を行った。その結果、いくつかの要因が仲直りの過程に影響を与えていることが明らかになり、それらの結果を仲直りの過程を示すモデル図にまとめた（図4）。

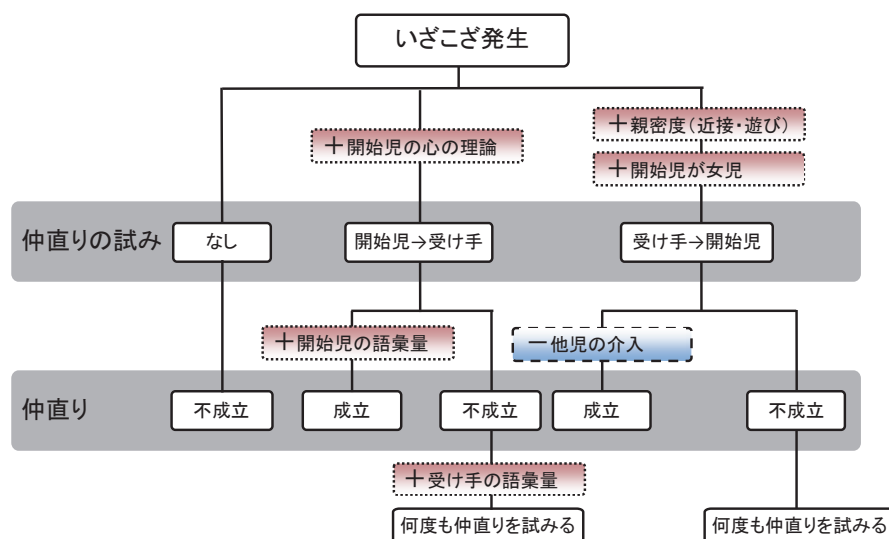


図4 いざこざ発生から仲直りが成立・不成立に至るまでの過程

□ は出来事を表す。下に進むほど過程が進んでいることを示し、出来事をつなぐ線の分岐は両方の可能性があることを示す。
 ■■■ は次の出来事が起こりやすくなる要因を、■■■■ は次の出来事が起こりにくくなる要因を表す。

まず、いざこざが発生した後、「仲直りの試み」が起きるかどうかに影響を与えている要因を検討した。仲直りの試みの方向性を考慮した分析の結果、開始児が心の理論を獲得している場合、開始児は受け手と仲直りしようと試みやすいことがわかった。一方でその他の候補要因の影響はみられなかった。この結果から、開始児が仲直りを試みるには受け手の社会的能力の高さは関係がなく、開始児自身の社会的能力が重要であることがわかる。開始児の社会的能力のうち、言語能力は開始児が仲直りを試みる動機には影響がなかった。言語能力は伝達や思考の手段であり、他者とのコミュニケーションにおいて重要な役割を担うが、仲直りの試みの有無に最も重要であると考えられる仲直りの

動機づけそのものとは結びつかなかったと考えられる。

心の理論を獲得している児は他者の心の状態を推測できるため、自らの攻撃行動を受け手が嫌がっていたこと、受け手との関係が傷ついたことを読み取ることができたと考えられ、それが関係修復の強い動機につながったと考えられる。一方で、他者感情理解の能力は開始児の仲直りの動機づけに影響を与えていなかった。他者感情理解の能力は共感性と強く関連している。共感とは、他者の感情表出を見たときに同じ感情が自分自身にも生起する現象である（大西，2018）。そのため、他者情動理解の能力が高い児はいざご後の受け手のネガティブな感情表出から自分もネガティブな感情を感じ、他者の情動状態は理解できていたと考えられる。しかし、共感性を発揮して相手の情動状態がわかるということは自ら仲直りができるための前提条件のようなもので、それだけで仲直りが起きるわけではなかった。恐らく、他者の情動状態がわかるということの後に、自分の攻撃行動が相手の心情を害し、相手がネガティブな感情とともに、「自分に対して」怒りを持っている、その相手の心的状態を解消しなければ相手との関係性が損なわれるということを理解する段階があると考えられる。このため相手の情動状態がわかるだけでは仲直りの動機づけには結びつかず、心の理論まで獲得して初めて仲直りへの強い動機付けが生まれるのだろう。

一方で、受け手から開始児への仲直りの試みには、開始児の社会的能力と受け手の社会的能力のどちらも影響していなかった。ここで注目すべきは、開始児からの仲直りの試みには開始児の心の理論の有無が影響していたのに対し、受け手からの仲直りの試みには受け手の心の理論の有無は影響していなかったということである。受け手が心の理論を獲得していれば、開始児が自分に対して何らかの不満があり攻撃してきたことや、現在両者の関係が損なわれていることを理解することが容易になる。しかし、受け手が開始児の心的状態を理解していても、仲直りの動機づけは生まれなかった。これは、いざごに關与した児が相手の心的状態を推測できるとしてもそれだけでは仲直りの試みにつながらないということを表している。では、攻撃の開始児と受け手の間に予測される違いとは何であろうか。一つの可能性として、開始児が攻撃を起こしたことで抱くであろう罪悪感があげられる。罪悪感とは、「逸脱行為を行った状況で、自己の行為をネガティブに評価し、その行為が他者に及ぼした影響に関心を向けた場合に生起し、その影響の修正や他者への弁明・謝罪といった表出・行動を顕在化させる情動」と定義され（久崎，2005）、2、3 歳齡頃から出現するとされている（Zahn-Waxler & Robinson, 1995）。罪悪感があれば自己の行為をマイナスに評価し、その行為が他者に及ぼした影響に関心を向ける。そのため、その行為や影響を改善することで他者との関係を回復および維持しようとする行為傾向が生じる。この傾向は自己の行為による影響を修正し、他者に弁明や謝罪する表出・行動を顕在化させると考えられている（Barrett, 1995）。今後、心の理論が獲得されていることで、罪悪感が働きやすくなり、その結果仲直りの動機づけが起こる可能性について、さらに詳細な検討が必要になるだろう。

受け手からの仲直りの試みに影響を与えていたのは児の親密度と開始児が女児であることであった。受け手は最初に攻撃を受けた児であり、開始児よりも立場が弱かったり、開始児に対してより強い不満をもちやすいことが予測される。先行研究から仲直りが失敗した場合にはさらに攻撃を受ける可能性が示されており (Fujisawa et al., 2005)、受け手は仲直りの試みを行うリスクが高く、動機づけが弱い立場であると考えられる。それでは、何が受け手の仲直りに対する動機づけを高めるだろうか。それは、いざこざ時に起こった開始児からの攻撃が激しくなく、不満がそれほど高くなかったり、仲直りの試みを行う際のリスクが低かったりする場合か、もしくは、開始児との親和的関係の価値が高いときであろう。前者は、開始児が女児であったり、もともと仲の良い間柄であったりすれば起こりやすいかもしれない。また普段の関係が親密であれば、親和的関係により高い価値があると考えられている。これらの理由が媒介することで、開始児が女児であることや親密性の影響が、受け手の仲直りの試みをより強く促進したのかもしれない。

仲直りの試みが生じた後、仲直りの成立に影響を与える要因について検討すると、開始児の言語能力が高い場合、開始児からの仲直りの試みが受け入れられやすいことが明らかになった。「仲直りの試み」の生起に言語能力の影響はみられなかったため、言語能力の高い開始児はより試みを起こしやすいのではなく、より受け入れられるような試みを行うと考えられる。また、言語能力の高い児は同年齢児からの人気が高いため (Braza et al., 2009; Mostow, Izard, Fine, & Trentacosta, 2002)、言語能力の高い開始児からの試みは受け入れられやすかったのかもしれない。ただ、近接や遊びにおける開始児の中心性は開始児からの試みによる仲直りの成立に影響していなかった。中心性は、クラスの中で、遊んでいる児や近くにいる児が多いほど高い値を示す傾向にある。そのためこの値は普段クラスの中でその児がどのくらい他児から人気があるかと関連していると考えられる。中心性の影響がみられなかったことから、言語能力の高い開始児の人気が高いために仲直りの試みが受け入れられやすかった可能性は弱まり、言語能力が高い児は、仲直りの試みの中で、言語を用いた上手い方略を駆使している可能性が高いと考えられる。

開始児の心の理論の有無や、共感性の高さは、試みた仲直りが成立しやすいかどうかとは関連していなかった。開始児が心の理論課題を通過しているときには、開始児が仲直りの試みを行うことが多い。しかし試みが多いからといって受け入れられやすいわけではなかった。

受け手から開始児に対して行われた仲直りの試みを成立させやすくする要因はなく、他児が介入すると仲直りが成立しにくくなるという結果が得られた。本研究では、受け手から開始児への仲直りの試みが受け入れられた事例には他児の介入がほとんど起こっていなかった。仲直りが成立しなかった事例において起こっている他児の介入内容を見ると、開始児もしくは受け手への親和行動、攻撃行動が多く起こっており、仲直りの提案、保育士への報告も頻度は低いが確認された。他児による攻撃行動はいざこざを助長させると思われる一方、親和行動も仲直りの成立には逆効果であったと考えられる。

Fujisawa et al. (2006) では、受け手への他児の親和行動は、5 歳齡ではいざごがない場面よりもいざご後に多く起きるが、3、4 歳齡では差がなかった。さらに、いざご後の受け手への親和行動は 4、5 歳齡では受け手のストレスを軽減することにつながるが、3 歳齡ではその効果はなかった。本研究では、このような慰め行動的な介入も、仲直りが成立していないときにのみ起こっていた。ただ、仲直りが成立しにくいような激しい攻撃を伴ういざごのときに慰めがあった可能性も排除はできない。さらに、本研究では、仲直りの提案や保育士への報告が起こっていても、仲直りの成立に結びつくような効果が見られなかった。実際に保育士が介入した事例においても仲直りの成立の割合は上がっていなかった。

最後に、仲直りの試みが受け入れられなかった後に仲直りの試みを継続する回数に影響を与える要因を検討した結果、開始児が受け手に対して仲直りの試みを行ったが受け入れられなかった場合、受け手の言語能力が高いと開始児が行う仲直りの試みの回数が多いという結果が得られた。言葉を巧みに操ることができる受け手は一度開始児が行った試みを受け入れない場合にはその後も断り続け、その結果、開始児が仲直りをしたいという動機が強い場合には（開始児の社会的能力によってこの動機の強弱は左右されなかったが）、開始児が何度も仲直りを試みることになっている可能性がある。ここでも受け手が言語能力が高いため他児にとって魅力的であるという可能性はあるが、児の人気により関連すると考えられる中心性が影響していないので、この可能性は低いと思われる。

本研究では、いざごから仲直りの成立 / 不成立、その後までを場合分けし、それぞれのフェイズにおいて仲直り行動に影響する要因を、開始児、受け手のそれぞれの能力や行動を区別しながら分析した。本研究では、事例数が十分ではなかったことから全ての要因を同時に扱う多変量解析は行えず、また影響を与える要因がなぜそのような影響を持つのかを細かな文脈まで分けて解析することはできなかった。しかし、本研究が示したモデル図が表す視点は、幼児の社会的能力と仲直りの関連を調べる上で価値のあるものであり、今後より多くのデータを用いて、協力児の年齢を広げて同様のモデルを分析することで、仲直りの過程や影響する要因をより詳しく把握できるだろう。

謝辞

本研究は、比較発達心理学研究分野における共通プロジェクトである「乳幼児の社会的発達の行動学的研究」に基づき、日野林俊彦教授（研究実施当時）、金澤忠博教授を中心として、企画、立案、実施された。プロジェクトの運営、フィールドの維持に多大なる貢献をされた日野林俊彦教授、金澤忠博教授に感謝の意を表します。また本稿は、上記研究の一部を構成する平成 24 年度 大阪大学人間科学部 卒業論文「3・4 歳齡保育園児の社会的能力と仲直り行動」（桑岡樹）をもとに、データを再検討し、まとめ直したものである。本研究の遂行にあたり多大な貢献をいただいた桑岡樹さん、様々なご助言をい

ただいた比較発達心理学的研究室と比較行動学研究室の皆様へ感謝いたします。

引用文献

- 浅川潔司・松岡砂織 . (1987), 「児童期の共感性に関する発達的研究」, 『教育心理学的研究』 35 号, 231–240 頁 .
- Barrett, K. C. (1995), A Functionalist Approach to Shame and Guilt, In J. P. Tangney & K. W. Fischer (Eds.), *Self-Conscious Emotions: Shame, Guilt, Embarrassment, and Pride*. (pp. 25–63). New York: Guilford Press.
- Braza, F., Azurmendi, A., Muñoz, J. M., Carreras, M. R., Braza, P., García, A., Sorozabal, A., et al. (2009), Social Cognitive Predictors of Peer Acceptance at Age 5 and the Moderating Effects of Gender, *British Journal of Developmental Psychology*, Vol.27-No.3, pp.703–716.
- Butovskaya, M., & Kozintsev, A. (1999), Aggression , Friendship , and Reconciliation in Russian Primary Schoolchildren, *Aggressive Behavior*, Vol.25, pp.125–139.
- De Wied, M., Branje, S. J. T., & Meeus, W. H. J. (2007), Empathy and Conflict Resolution in Friendship Relations Among Adolescents, *Aggressive Behavior*, Vol.33, pp.48–55.
- Dunn, J., & Cutting, A. L. (1999), Understanding Others, and Individual Differences in Friendship Interactions in Young Children, *Social Development*, Vol.8No.2, pp.201–219.
- Feshbach, N. D., & Roe, K. (1968), Empathy in Six- and seven-year-olds, *Child development*, Vol.39-No.1, pp.133–45.
- Fujisawa, K. K., Kutsukake, N., & Hasegawa, T. (2005), Reconciliation Pattern after Aggression among Japanese Preschool Children, *Aggressive Behavior*, Vol.31-No.2, pp.138–152.
- Fujisawa, K. K., Kutsukake, N., & Hasegawa, T. (2006), Peacemaking and Consolation in Japanese Preschoolers Witnessing Peer Aggression, *Journal of comparative psychology*, Vol.120-No.1, pp.48–57.
- Happé, F. G. (1995), The Role of Age and Verbal Ability in the Theory of Mind Task Performance of Subjects with Autism, *Child development*, Vol.66-No.3, pp.843–55.
- 久崎孝浩 (2005), 「幼児の恥と罪悪感に関連する行動に及ぼす発達の要因の影響」, 『心理学研究』, 76 号 4 巻, 327–335 頁
- Ljungberg, T., Westlund, K., & Lindqvist. Forsberg AJ. (1999), Conflict resolution in 5-year-old Boys: Does Postconflict Affiliative Behaviour Have a Reconciliatory Role? *Animal behaviour*, Vol.58-No.5, pp.1007–1016.
- Martin, P., & Bateson, P. (2007), *Measuring Behaviour: An Introductory Guide*, Cambridge: Cambridge University Press.

- Mostow, A. J., Izard, C. E., Fine, S., & Trentacosta, C. J. (2002), Modeling Emotional, Cognitive, and Behavioral Predictors of Peer Acceptance, *Child development*, Vol.73-No.6, pp.1775–1787.
- 小川絢子・子安増生 (2008), 「幼児における「心の理論」と実行機能の関連性：ワーキングメモリと葛藤抑制を中心に」『発達心理学研究』, 19 号 2 巻, 171–182 頁
- 大久保義美 (1991), 「乳幼児の言語発達」, 鹿野輝三・白岩義夫・内藤徹編『乳幼児心理学』ナカニシヤ出版, 103-118 頁
- 大西賢治 (2018), 「第 6 章 共感と向社会的行動の生物学的基盤」尾崎康子・森口佑介編『発達科学ハンドブック 第 9 巻 社会的認知の発達科学』新曜社, 74-87 頁
- Premack, D., & Wooclyff, G. (1978), Does the Chimpanzee Have a Theory of Mind? *Behavioral and Brain Sciences*, Vol.1-No.4, pp.515–526.
- 斉藤こずゑ. (1986). 第三章 仲間関係. 無藤隆・内田伸子・斉藤こずゑ (編著) 子ども時代を豊かに 学文社 (pp. 59–111).
- 上野一彦・名越斉子・小貫悟 (2008), 『PVT-R 絵画語い発達検査』日本文化科学社
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ (1986), 「幼児の共感と母親の共感との関係」『教育心理学研究』 34 号, 324–331 頁
- Westlund, K., Horowitz, L., Ljungberg, T., & Jansson, L. (2008), Age Effects and Gender Differences on Post-conflict Reconciliation in Preschool Children, *Behaviour*, Vol.145, pp.1525–1556.
- Wimmer, H., & Perner, J. (1983), Beliefs about Beliefs: Representation and Constraining Function of Wrong Beliefs in Young Children's Understanding of Deception, *Cognition*, Vol.13, pp.103–128.
- 安田純・日野林俊彦 (2009), 「他児のいざこざへの保育園児の介入行動」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』 35 号, 99–118 頁
- Zahn-Waxler, C., & Robinson, J. (1995), Empathy and Guilt: Early Origins of Feelings of Responsibility. In J. P. Tangney & K. W. Fischer (Eds.), *Self-Conscious Emotions: Shame, Guilt, Embarrassment, and Pride*. (pp. 143–173). New York: Guilford Press.

Factors Affecting Reconciliation after Aggression Among 3 to 4-Year-Olds

Kenji ONISHI

Reconciliation is an important behavior for children to restore a relationship damaged by aggression and maintain good friendships with peers. It also reduces the risk of re-aggression and stress after conflict among pre-school children. Previous studies have investigated reconciliation processes and factors that affect their operation among children. For example, sex combination between opponents, pre-conflict interactions, and post-conflict proximity have been found to affect the occurrence of reconciliations. Moreover, relationship quality between opponents was related to reconciliation and occurred more often among friends than non-friends.

Certain social abilities, such as theory of mind, verbal ability (vocabulary), and understanding of others' emotions, affect communication ability and peer friendships among children. This suggests that these social abilities may also affect the occurrence and acceptance of reconciliation.

Although there are many studies of reconciliation among children, it is still unclear how individual social abilities influence reconciliation. It is essential to record who initially starts the aggression and who is the initial victim and analyze data considering the "initiator of aggression" and the "initial victim."

In this study, I investigated patterns of reconciliation after aggression among Japanese 3 to 4-year-old preschool children in order to reveal factors that influence its occurrence or acceptance, while focusing on the direction of reconciliatory attempts. Considering previous studies, I chose the following variables as potential factors which are related to reconciliation: social abilities (theory of mind, verbal ability (vocabulary), and understanding of others' emotions), social relationships (centrality in social proximity network, centrality in playing network, and friendship between opponents), the sex combination between opponents, and intervention of a third party, such as another child or a teacher.

This study was conducted in a private nursery school in Osaka, Japan. Participants were 24 3- to 4-year-olds (10 boys and 14 girls). We conducted observation in order to collect data on aggression and reconciliation during free play time. Also each participant joined 3 experiments (the false belief test for theory of mind, the "Picture Vocabulary Test Revised" for verbal ability, and the affective situation test for understanding of others' emotions) and each child's individual social ability was assessed.

The findings indicate that the occurrence rate of reconciliatory attempts by the initiator of the aggression was higher when the initiator passed the false belief test than when the initiator did not. However, the theory of mind of the initial victim did not affect reconciliatory attempts. A theory of mind is necessary to understand others' thoughts or feelings. Therefore, initiators with a theory of mind could understand the victim's thoughts or feelings that were caused by the initiator's aggression and sometimes feel a sense of guilt or necessity of friendship restoration. This can explain why a victim's theory of mind did not affect reconciliatory attempts.

As for the acceptance of reconciliation after the initiator's reconciliatory attempts, the acceptance rate was higher when the initiator's verbal ability (vocabulary) score was high than when it was low. This suggests that initiators with high verbal ability are able to use more effective tactics in their reconciliatory attempts.